



大方あかつき館報

第9号
2004年1月発行

あかつき

上林暁の人と文学

高知県経営者協会前専務理事 松本秀正

(これは平成十五年九月二十一日、大方あかつき館で開催した文学講座「上林暁の人と文学」に、一部加筆修正したものである。)

一、上林暁という人

いまから約五十年も昔になりますが、私が東京で貧しい学生生活を送っていた時、上林さんに変なお世話になりました。お世話になったと言うよりも、救ってもらったと言うのが正しいかもしれません。生活やアルバイト、住まいのことなどを親身になって気づかせてもらい、また、日常生活を通して、人間いかに生くべきかについても、教えられたように思います。

いつか、上林さんが帰郷された折、私の母がお訪ねして、「息子が大変お世話になっていきますのに、なんのご恩返しもできませんで…。」とお詫びすると、上

林さんは、「いや、真面目に学問してくれることが何よりです。よく頑張っていますよ。」と言われたことを、母から聞いたことがあります。

私は曲がりなりにも卒業すると、平凡なサラリーマンになり、上林さんがあまり好まれなかった「俗塵にまみれた人生」を過ごしてきました。そして、とうとう「恩返しをしないまま今日に至っていることに、忤^じたるものがあります。

きょうはこの文学講座に呼んでいただいて、光栄に思いますとともに、私の拙^{つた}い話で、上林さんのご恩に幾分でも報いることができればと思って、ここに立っています。

山田一郎さんの話

ある時、山田一郎さん(土佐山内家宝物資料館理事長・館長)が私に、こう述懐されたことがあります。

「上林さんの生家を初めて訪ねて、家の造りが立派だったのでびっくりした。屋敷の中に、蚕を飼っていたという二階建ての大きな納屋がある。あの建物を、上林文学資料館などに使われてはどうだろうか。いい

資料館になると思うよ。

考えてみると、昔、帝国大学へ息子をやろうという家だから、徳広家は素封家だったんだね。」

山田先生は、下田の口の生家を訪ねるまでは、ごく普通の小さな家を想像されていたようでした。

上林さんは出自^{しゅじ}を飾らない人でしたから、上林作品からは、実家が地主で、造り酒屋、お父さんが村長という裕福な家庭の出身という印象は薄いです。山田先生の想像は自然だったと思います。

さて、今日の講座では、作品の中から『野』『名月記』『聖ヨハネ病院にて』の三つを取り上げて、皆さんと考えてみたいと思いますが、これらの作品は、上林さんが三十歳代から四十歳代にかけて書かれた傑作です。

上林さんは、昭和三十七年六十歳の時、脳出血の再発(五十歳の時脳溢血で左半身不随となるが、その後回復)で倒れますが、五十五年八月七十七歳で亡くなるまでの十八年間で、右手、足、口が不自由の身で、妹睦子さんに助けられ、口述筆記で『白い屋形船』『ブロンズの首』など、珠玉の名作をつぎつぎに発表されました。

上林文学を愛する人たち

上林さんは流行作家にはなりませんが、上林作品を心から愛する熱心な読者が、日本国中にいるといわれます。上林文学を評して「静かな滋養だ」と言ったのは、中野重治氏でしたが、けだし名言だと思います。静かな滋養にめぐり合えた読者は幸運です。私は、ここで熱心な上林文学ファンの一人に出会った逸話を紹介することにします。

私が民間会社勤めていた昭和四十年頃の秋、上司である専務取締役の相伴をして、松山市道後の旅館に宿泊したことがあります。

その晩、専務が按摩を頼むことになり、間もなくして、中年の盲目の女性が部屋へ入ってこられました。

私たちが高知から来ていることを知ると、彼女は按摩を始めながら、明るい声で専務に「高知県から上林暁という、偉い小説家が出ていられますね」と、聞きました。彼女は、点字で『ちちはの記』『明月記』『聖ヨハネ病院にて』などの小説を読んでいた、素晴らしい小説だと、何度も賞揚していました。

ところで専務は、東京大学経済学部卒の秀才でしたが、純文学とはおよそ縁のない人で、彼の読まれる物は、専ら「捕り物帳」の小説でしたから、「上林暁」については名前すら知りませんでした。その専務から、「松本、高知県にそういう作家がいるか」と聞かれた時、私は内心大いに得意になり、そして按摩さんの話に深く感動したことを覚えています。

昨年十月六日、上林暁生誕百周年記念式典がこの「あかつき館」で催され、その席上で、「高知朗読奉仕者友の会」が、上林暁全集十九巻をテープに収めた四百巻の目録を、松田会長から金子繁昌町長に寄贈されました。

大方町にとって、この上ないプレゼントを頂いたと思います。私は、その贈呈式の光景を眺めているうちに、かつて松山の道後で、按摩をしながら上林文学を熱心に語った女性のことを思い出していました。

上林さんは、「七度生まれ変わったとしても文学をやりたい」と言われましたが、精神的にも経済的にも追い詰められた苦しい生活の中でも、人間の善意を信じ、静かに澄んだ目と温かい心を持って人生を見つめ、文学を探究し深めていきました。そして、病魔との死闘を続けながら、名作をつぎつぎに世に出された、その凄まじさに圧倒されますが、そこまで頑張ることができたのは、睦子さんの想像を絶する献身があったからでした。

ここで、上林さんの『開運の願』と、睦子さんの『兄の左手』の一部を読みます。

『開運の願』

（妹が）東京に初めて出て来た時は、まだ二十歳の田舎娘であった。兄である私の面倒を見ている間に、婚期を失ってしまった。女にとって、これくらい不幸なことはないであろう。妹はその不幸にたえて今日に至っているが、私は妹の顔に時々暗い影の射すのを見逃すことができない。

妹を不幸にしたのは私である。私は文学をやるために妻を犠牲にし、返す刀で妹を犠牲にしたと言われても返す言葉がない。私は時折断腸の思いがする。

『兄の左手』

「青春も結婚も投げうって、後悔しませんか」私はよく人から聞かれることがある。後悔してみたところで、悲しくなるだけのことで、人生が逆に廻るものでもない。それに後悔することは、自分の人生を否定することにもなる。

私は運命に従い、自分なりに精いっぱい生きてきたという思いによって支えられている。私にとっては、これからをいかに生きるかということが、より問題なのである。

私のみでなく、精神病になり三十八歳の若さで死んだ兄嫁も、幼くして母親から引き離され、淋しい幼児期を過ごさねばならなかった子供たちも、また兄の文学の受難者であったといえよう。

さらには、孫の面倒を見、兄の病気で最後まで苦労しつづけて死んだ母も、そう言えるのではあるまいか。

田宮虎彦の死

高知県出身の小説家で、『足摺岬』『絵本』『落城』などの名作を書かれた田宮虎彦さんが、昭和六十六年四月九日の朝、東京青山のマンション十一階のベランダから飛び降り自殺をしました。当時の新聞に出ましたので、覚えている方もおられると思います。

睦子さんから直接聞いた話ですが、田宮さんは自殺する前の晩に、小説家で文芸評論家の渋川驍氏に電話をかけてきたそうです。

田宮さんは電話で、「もう生きていく自信がない。死にたい」と言われた。彼はその一月、脳梗塞で倒れ入院、三月下旬に退院していました。

渋川氏は、「元氣を出せよ。上林のことを思ってみろよ。最後まであんなに頑張ったではないか」と、励まされたそうですが、それも空しく翌朝の九時過ぎ、変わり果てた姿で発見されました。

一人暮らしだったと言われる田宮さんは、病氣と孤独に耐えられなかったのでしょうか。

上林さんが生まれたのは明治三十五年、渋川さんは同三十八年、そして田宮さんは同四十四年。三人は共に東大文学部卒で、親しい間柄でした。

私は上林さんのことを思う時、睦子さんの存在がいかに大きかったかを、改めて考えるのです。（次号に続く）

上林暁を全国区へ

― 第一回「上林暁研究会」報告を添えて ―

園田学園女子大学

国際文化学部教授 吉村 稠

二〇〇二年（平成十四年）十月六日、「上林暁生誕百周年記念式典」が、郷里の高知県幡多郡大方町、大方あかつき館で開催された。諸々の企画がある中で、上林暁の創作活動とその文芸性を担うともいえる「上林暁文学賞」には、五百三十一編の応募があった。三浦哲郎氏の選によって最優秀賞一編と優秀賞、奨励賞、佳作が選出された。記念事業実行委員長野並浩氏の「上林暁生誕百周年を振り返って」（『上林暁研

究」第十一号所収)の紹介記事によると、当日は二百人もの出席者であった、とある。私もその一人として会場の席につき、夢の一つが現実になったな、との思いを深めた。

原動力となつてこの事業を実現させて下さった上林暁顕彰会の方々に敬意を表したい。

ところで、問題が一つある。この「流れ」と言おうか「勢い」と言うべきか、の行き先である。おそらく上林暁とその文芸的業績の顕彰の機会として「大きな節目」となるのは、この先、生誕百五十周年か二百周年の記念まで待たねばならないだろう。その間、二百人もの出席者を得て生まれたエネルギーはどうなるのだろうか、という問題である。

もちろん、地元の方達もお考えだろうが、やはり私は、心配であった。

それは、私自身やり遂げようと計画していた、上林暁文芸の研究誌と研究会の進展状況に因することであった。幸い、十一年前に研究誌は『上林暁研究』として発刊し、現在第十二号の編集を進めつつあるまでに至つてはいるものの、もう一方の「研究会」が未だ日の目を見ていなかったからである。

私は、大方あかつき館にも、これまで何度かその企画―研究論文の募集等―を持ちかけてみたが、残念ながら実らないままであった。文学賞設定は、上林暁文芸の存在意義を全国に知らしめる意義あるアクションであったろう。

ならば、もう一つの方法で、上林暁文芸の世界を多くのの人々と―全国版で共有するべきである。研究機関を設置し稼働させること、がその意義ある方法である。すなわち、上林暁文芸が今後、幾世代間に渡つて「研究」という行為によつて継承されていくよう仕掛けることである。

文芸作品は次第に読者を失いつつあるという現況の

下で、多くの研究者を持つ作家の作品は、五十年、百年の時を経てやはり版を重ねて残っている。それは、作家と作品の特質や意義の問題が究明され、その見解の応酬が時代の中で水脈となつて継承されるからである。結果として、その作家の代表作等は、絶版などにはならず、また新しい読者を生み出すことに結びつくのである。

大方という地元においての「郷土の作家上林暁」の存在を伝える活動は、十分になされてきた、と私は実感している。しかし、この段階に止まつては駄目である。長い年月をかけて、地元の顕彰会を中心とした着実な活動があり、一九九八年四月には、大方あかつき館が誕生した。その流れが、冒頭に記した、暁の生誕百周年記念事業である。

このエネルギーは、この機を逃さず全国区に向けるものへと展開しなければならない、と私は考えている。

さて、一転して手前味噌な話になるが、お許しただきたい。

ここまで述べてきた意図のもとに、私は、かねてから「上林暁研究会」を誕生させたい、と考えていた。遂一の経過はさておき、とにかく、上林文芸を通じて触れた人々には、必ず研究会への協力と参加を呼びかけてきた。

生誕百周年式典は、その絶好の機会だと考え、自費発行の『上林暁研究』誌上にも記して、参加を呼びかけた。私の勤務する園田学園女子大学の一角を会場とした。当日の次第は、左のごとくである。

第一回 上林暁研究会 (八月二日午後二時)

○開会の挨拶 吉村 稠

○研究発表「戦時下の上林暁」 中村清治

○紹介 大方あかつき館 吉村 稠

○出席者の自己紹介

○閉会の挨拶 萩原 茂

○懇親会「万」にて (午後五時半)

発表については数人の問い合わせがあったが、なにごん第一回という当方の緊張感で中村清治氏お一人に限定した。「戦時下の上林暁」の概要については、『上林暁研究』第十二号(二〇〇四・三刊行予定)をお読みいただきたい。

中村氏の発表は、戦後すぐに、戦時体制への批判を行つた上林が、その言説とは裏腹に、戦時下では時局に寄り添つた発言をしている、との主旨であった。この発表を軸に、実に熱心に質疑応答が交わされた。懇親会でもこのことが話題となり、出席者間での研究状況や情報交換がなされ、ほぼ十時頃に散会となった。

私のもとに、すでに第二回の開催の要望と発表希望が届けられている。東京で、の考えを持ちながら、研究会を通して、上林暁と彼の文学世界が全国区に向けて、一つの小さな歯車を回転させたかな、との思いを抱いている。

上林暁文芸全国区への進展のためにそれぞれの場から協力し合いたいものである。



第1回上林暁研究会風景

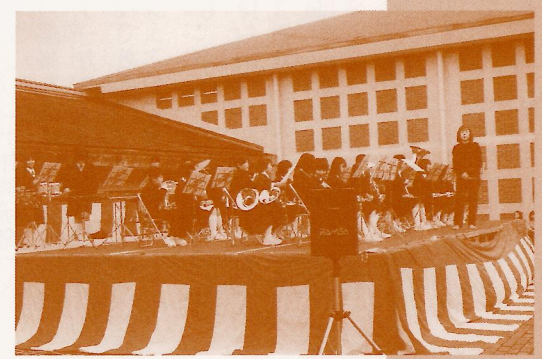
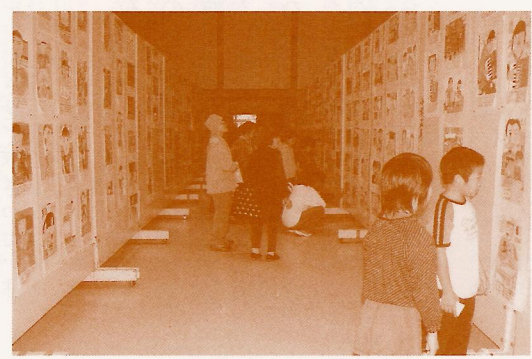


昨年の催し風景

第41回大方の秋まつり 11月8日～9日

町の総合文化祭として、美術展には町内児童・生徒さん町民の皆さんの優れた作品が展示され、来館者を魅了しました。

郷土芸能は、雨天のため中止となりましたが、両日にわたり多くの人々が訪れ楽しんで頂きました。



マルク・シャガール版画展

15年11月16日～29日の間、あかつき館2階で開催されました。県立美術館の協力により23点の作品が展示され、多くの皆さんに鑑賞して頂きました。



色彩豊かな版画を鑑賞し、多くの人に感銘を与え、何度見てもすばらしい絵に感動した。また、ぜひこのような展示の機会をもってほしい旨のご意見が寄せられました。

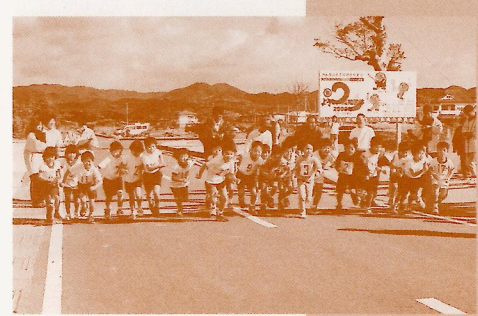
お知らせ 町立図書館

2月の図書館の休館について

- 図書館の特別館内整理期間として蔵書点検のため、2月23日～27日の間、休館となります。お気をつけ下さい。

生涯スポーツ

- 2月1日 大方町マラソン大会
大規模公園体育館
- 3月7日 大方町民駅伝大会兼四国のみち駅伝大会
ふるさと総合センター
- 3月中旬 大方町ジュニアバスケットボール大会
大規模公園体育館



マラソン大会スタート風景